

# 東日本大震災から半年

## 奮闘の記録

東日本大震災は東北だけでなく、関東にも多くの被害をもたらした。常磐自動車道も茨城県内で一部が崩壊するなどの被害が出た。東日本高速道路水戸管理事務所の要請を受け、現地で応急復旧を指揮したNIPPOの藤田将寛所長は「何もかもが初めての経験。現実離れした1週間だった」と直後の対応を振り返る。

### 1週間もなく突貫で

地震発生時、常磐道友部サードエリアの改良工事を施工していた同社。人も建機もそろっていたため、東日本高速道路と協議し、改良工事をいったん休止、地震の翌日に当たる3月12



藤田所長

段差修正やクラックの補修で済みそうだった

が、1カ所だけ道路が大きく崩壊している箇所が見つかった。両側に田んぼが続く92・5キボスト周辺で延長1500mにわたって崩れていた。「ここだけは土工事からすべてをやり直すこ

日から常磐道再開などの応急復旧工事に着手した。「11日の復旧には東日本高速道路の担当者で現場を回り、被災状況を確認した」

## NIPPO

### 協力会社確保に奔走

緊急車両を通しながら、まず崩れた舗装、そしてその下の土砂も含めて4000立方mをダンプで撤去した。続いて施工性の良さなどから土砂の替わりに砕石を敷き、その上を舗装した。社員と作業従事者約15人が24時間体制で突貫作業に当たった。

藤田所長は、1994年に起きた北海道東方沖地震を経験し、その復旧工事にも携わったが、「今回の方がずっと深刻な状況」だと感じている。直後の1週間を振り返り、「本日に工期に間に合うのか。余震でまた



崩れるのではないかと眠れぬ日々を過ごした。当時、一番苦労したのは情報量の不足。「震災直後はラジオだけが頼りだった。福島の子力発電所が爆発したと聞き、屋外で仕事を続けることに不安を

覚える作業従事者も少なくなかった」。心配する彼らを前に「分からないことを不安がっていても仕方ない。危険な状態になれば、東日本高速道路やNIPPO本社から必ず連絡があるはずだ」と説き、安心させた上で作業を続けた。

電話が通じず、協力業者などの連絡にも苦労は多かった。「地震後は携帯が忘れられないのが、絶対に材料を不足させないようにするので、安心して工事に専念してほしい」というNIPPO本社、支店からのメッセージだった。作業従事者も本社や支店が連携して手配し、関東近県から送り込んだ。「自分の会社ながら組織力を頼もしく感じた」ことが今も忘れられない記憶として残っている。

当時、燃料などの物資が不足し、合材工場も一時は出荷が止まった。茨城合材工場（茨城県茨城町）は停電の影響で操業できず、3月12、13の両日はすぐに対応可能だった筑波合材工場（茨城県つくば市）からアスファルト合材を運んだ。

燃料は最も遠い場所だと山口県岩国市から届いた。藤田所長が忘れられないのが、「絶対に材料を不足させないようにするので、安心して工事に専念してほしい」というNIPPO本社、支店からのメッセージだった。作業従事者も本社や支店が連携して手配し、関東近県から送り込んだ。「自分の会社ながら組織力を頼もしく感じた」ことが今も忘れられない記憶として残っている。

# 不安がる作業員 懸命に説得